

## 福岡市主婦卓球愛好会の活動を通じたオルタナティブな主婦像の構築：「主婦」という立場性に対する会員の意識変容に着目して

松永, 圭世  
九州大学大学院人間環境学府 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/7172573>

---

出版情報：社会教育研究紀要. 5, pp.15-20, 2024-02-29. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

# 福岡市主婦卓球愛好会の活動を通じたオルタナティブな 主婦像の構築

— 「主婦」という立場性に対する会員の意識変容に着目して—

## Building an Alternative Image of Housewives through the Practice of the Table Tennis Association of Housewives in Fukuoka City

— A Focus on the Changing Awareness of Members Toward the Positionality of  
“Housewives” —

松 永 圭 世<sup>\*</sup>  
Matsunaga Kayo

### 1. 愛好会の草創期における「主婦」

本論の目的は、福岡市主婦卓球愛好会（以下、愛好会）の活動を通して、会員である主婦たちがその立場性に向き合う様相を描き、意識変容の契機を検討することである。愛好会は1971年に発足して以来、その名が冠するように、「主婦」の集団であるということを前提に据えて活動を続けてきた。本論においても、「主婦」という立場を同じくする者たちが集うという特徴に着目し、検討を進める。

本論では、愛好会の草創期である1970年代から80年代初頭に焦点をあてる。その理由として、一点目に、同時期は前田恒子さんが初代会長を務めていた時期であり、愛好会の基盤形成にあたり重要な時期であったと考えられるためである。後に取り上げるように、前田さんの姿勢やその意思を反映した愛好会の精神には多くの会員が感化され、自らの立場性を再考する契機となった。そして二点目に、同時期は「夫は外で働き、妻は家で家事や育児をする」という固定概念が根深く蔓延していた一方で、性別役割分業を疑問視する声があがり始めていた移行期にあたる。愛好会会員においても、伝統的な主婦像に従う必然性を感じつつも、そのことに不満を抱いたり閉塞感を感じたりしていた様子がうかがえる。従順さと抵抗、その狭間にある会員たちの心境の揺れ動きが明確に現れる時期であるともいえよう。

なお、本論でいう「伝統的主婦像」には、戦後日本において規範的とされてきた「賢明なる主婦像」という江刺正吾（1992）<sup>1)</sup>の定義を援用する。それは、「夫に『内助の功』として尽し、子供には『教育ママ』で、必要によっては家計補助者として『パートで働き』、マイホームを守る『女主人』として家庭経営を行う」という、妻役割・母親役割・主婦役割の三重の役割を課された存在である。「主婦」が「地域で」「スポーツを」行うことに対しては、妻・母親・主婦というそれぞれへの役割期待や固定概念が投げかけられる。本論では、この複層性もたらす会員への影響についても意識的に扱っていく。

まずは、1970年代から80年代初頭の主婦がおかれた状況を、社会的文脈から概観してみたい。当時会員であった者の多くが幼少期から青年期を過ごした1950年代には、朝鮮戦争もたらした特需景気によって、夫の収入のみで一家が養われるようになった。そのことは、「女は家庭で家事」という性別役割分業の意識や既婚女性の専業主婦化を強めることとなった<sup>2)</sup>。そして1950年代後半から20年間ほどの高度経済成

<sup>\*</sup>九州大学大学院人間環境学府修士課程

長の時代においては、主婦たちはサラリーマンである夫を家庭で支える役目を担うようになっていた。つまり、会員たちは、自らの母親が性別役割分業の意識が強い中で専業主婦として生きる姿を目の当たりにしつつ、自らも同様に家庭で夫を支える存在になっていったのである。

家事や家族の世話への期待を一身に背負う状況下でスポーツに取り組むには、夫や家族の理解、時間やお金のやりくりなど、本人だけでは対処し難い問題が存在しており、主婦のスポーツへの参与は容易ではなかった。しかしながら「主婦」がスポーツをするということの困難さを抱えつつも、会員たちは活動を続けてきた。果たして彼女たちは主婦・妻・母という三重の役割期待への応答と愛好会の活動の継続という困難さに、どのように向き合い、折り合いをつけてきたのだろうか。そしてその過程で、どのような意識変容が生じたのだろうか。

このような問題関心から、本論では、1970年代から1980年代半ばの会報（2～10号、記念特集号：1974～1983年）を中心とした史料分析と、愛好会の初期を知る中原圭子さんへのインタビュー調査<sup>3)</sup>、主婦卓球愛好会や既婚女性とスポーツについて論じられた文献を用い、会員が「主婦であること」に向き合う様子、そして意識変容の契機と様相について検討する。

## 2. 愛好会の基盤形成の背景と過程

### (1) 自律型組織としての愛好会

愛好会は1971年に設立されて以降、数多の壁を乗り越えながら運営を続けてきた。その時々で会員たちは学び、話し合い、行動を起こすことを重ねてきた。そのような組織基盤が形成された背景をまずは概観したい。

愛好会は公民館の主婦卓球サークルが集まって結成された団体であり、社会体育の位置付けの下で活動を行ってきた。愛好会が設立された1970年代当初、地域スポーツ運動は黎明期を迎え、多くのスポーツクラブが設立された。そして1970年代後半の地域スポーツ運動は二つの流れに分岐することとなる。厨・田上(1990)<sup>4)</sup>はその流れを以下のように表す。すなわち、一つは、楽しみや健康・体力づくりを求めた個人的で自由なスポーツ活動、つまり「私民的」スポーツ活動であり、公共スポーツ施設の不足や社会体育指導者の不足などがスポーツへの関心の高まりと重なり、営利的なスポーツ活動に人々は吸収されるようになった。そしてもう一つが、地域に根ざす自律型、自己実現型スポーツである。女性と高齢者を主な担い手とし、自らの力で活動計画や行事内容を企画・検討し、クラブや組織を自律的に運営しようとする集団が増えた。また、自らが楽しむだけでなく、スポーツ活動をめぐる内・外の諸問題を自主的に克服・解決したり、施設の確保や運営・管理への参加等に関わる人々やクラブも増加した。

地域スポーツ運動での方向性の二極化が進むなかで、愛好会は後者の「地域に根ざす自律型、自己実現型スポーツ」の流れを汲む活動の模範例として高く評価されている。例えば、厨・佐藤・井神(1990)は、「自発性や自前主義を原則としながら、民主的な運営形態や集団活動の仕方を身につけ、あるいは学びとり」つつ活動を展開し、「開かれた意識と民主的な手続きにより運営される」クラブとして、愛好会を取り上げている<sup>5)</sup>。特に、運営理念である八か条について、「『勝利志向』『競技力向上』を主目的にした、そして指導者による指導性の強い日本的クラブの運営理念や運営形態とは異質の考え方であり、新しいクラブ像とその運営の方向性」を示すものであると、その意義を提唱している<sup>6)</sup>。

ただし、愛好会の特徴として語られる民主的な運営体制は、設立当初から目指され、実現されていたわけではない。当時、他の多くの団体が直面したのと同様に、指導者の権威主義や勝利志向との葛藤といった紆余曲折を経て、自主的・民主的な運営体制を確立していったのである。そしていみじくもその確立の過程で、会員たちは自らの立場性と向き合いながら、オルタナティブな主婦像を構築していくこととなる。

## (2) 主婦による民主的な運営体制の希求と確立

愛好会が発足した1971年、多くの地域スポーツ運動団体においては勝利至上主義への傾倒が進んでいた。1973年頃までは、愛好会においても勝つためのチーム作りを行う傾向が強く、「底辺拡大、地域のための親善試合といいながら、実際にはチャンピオンを育てる方向で運営され、技術の高い人の発言が強くなるばかり」<sup>7)</sup> だったと、当時の会長の前田さんは回顧する。その要因の一つでもある、卓球協会という「大きな傘の下」で運営を行うことの限界を感じて愛好会は独り立ちを決意し、競技団体から独立した運営を目指して試行錯誤を続けることとなる<sup>8)</sup>。その後愛好会は、団体運営の主導権を自らが握り、主婦による主婦のための民主的な運営のあり方を模索していった。

民主的な運営体制という愛好会の特徴は、同時期に興隆したママさんバレーの事例と比較すると、一層際立つ。既婚女性を中心に組織されたママさんバレーの活動は1964年の東京オリンピック後に急拡大し、日本バレーボール協会によって全国統一が図られ、1970年には協賛企業の支援の下、全国大会が開催された<sup>9)</sup>。高岡治子(2018)によると、全国統一から全国大会の開催に至る背景には、関係者それぞれの思惑があったという。すなわち、日本バレーボール協会は、「主婦たちを束ねて社会体育の旗頭となること」を望み、協賛企業は「販売のターゲット」であり「経済活動を支える主婦層」を必要としており、「ママさんバレーは、主宰者である各機構の便益にかなった事業だったといえるだろう」と高岡は考察している<sup>10)</sup>。当時、協会や協賛企業の存在は、継続的かつ安定的に運営を続ける上で重要な位置にあり、主婦によるスポーツ団体が独立して運営を行なうには幾重ものハードルをこえる必要があった。しかしながら、愛好会は「勝つことだけを目標としない仲間づくり」<sup>11)</sup>を中心に据え、卓球協会からの独立を決め、消費社会への迎合や勝利至上主義への傾倒ではなく、運営方針の策定から実行、指導員の養成に至るまでを会員自らが中心的に担う道を歩み始めたのである。

## 3. 愛好会活動を通じた「主婦像」の再構築

### (1) 愛好会活動を通じた権利意識の芽生え

手探りのなか始まった、民主的な運営体制の構築に向けた道のりは、主婦たちが自らの立場性に向き合い、それを捉えなおしていくことから始まったといえよう。前述のように、愛好会が設立された1970年代においては、主婦は「伝統的主婦像」に基づく三重の役割期待を寄せられており、主婦がスポーツをすることに對しては、家族からも地域住民からも批判の眼差しが向けられていた。その実態は、愛好会会報への寄稿文に複数の視点から綴られている。例えば、初代会長の前田さんによると、「昼日中、子どもを放たらかして有閑マダムの集まりかと、町の古老達や婦人達に白い眼で見られたり、家の者に内緒で来ているから、買物ついでに卓球をするといった人達」<sup>12)</sup>もいたという。また、愛好会が活動していた体育館の館長も、「ラケット、水着を持って家を出るということが、近所の人々に分かったら『優雅な生活をやっていませんね』と皮肉の二つ三つの言葉が来るので、内緒でスポーツ練習場に行かないといけないと言われた時期」<sup>13)</sup> だったと愛好会の設立当初の状況を回顧しており、主婦という立場がスポーツを行なう際の障壁になっていたことがわかる。

また、男性を優位とする旧来の思想の残る地方都市という土地柄も相まって、主婦という立場は意見を持つことも声を出すこともない受動的な存在でもあった。愛好会の初期からの会員である中原さんは、当時は「主婦っていうのは、家庭にいるのが当たり前」であり、「自分の意見を言うとか、そんな場面は少な」く、「亭主関白が大量生産されていた時代」であったと言い<sup>14)</sup>、家庭で自己主張をすることなく、献身的に夫に仕える主婦像が規範として想定されていたことが窺える。そのような折、当時の会長である前田さんの一人一人の人権を重んじ、自立心を持って男性に対しても声をあげていく姿勢には、多くの会員が

感化されたという。そしてそのことは、自主的な運営体制の実現に向けて自分たちも声をあげていこうという機運の醸成に繋がっていく。

やっぱりすばらしかったのは、前田さんがきちんと社会教育の点で学習されていたからだと思います。そのおかげだと思います。一人一人のこう、人権って言うんですか。そういうところにちゃんと目を届かせてらしたし。まあ主婦っていう立場の、弱い立場ですよ。そういう人たちにちゃんと光を当たるような、そういう大会の組み方とか。決して、男社会のなかにもまれてやるんじゃないくて、自分たちでやろうよ、という、そういう声を出すってこと自体が新鮮だった時代ですから。みんな、こう意気込んでたなと思います。そのときの役員さんたち。会員もそれに熱意につられてだんだんと増えていったという状態です。<sup>15)</sup>

男性文化が根強く残るスポーツの世界において、女性がスポーツの場において主体者となり主導権を握ることは極めて困難であった。その点、愛好会は「女性差別の思潮と、この国のスポーツ運営組織が内包する圧倒的男性優位のメカニズム」を「実践を通じて克服」しつつあり、日本の女子社会体育界での比類なき組織であるとして、愛好会に長らく関わっていた田岡鎮男（1988）も愛好会を高く評価している<sup>16)</sup>。

## (2) 「主婦」という立場への思考の転換

主婦という立場は「弱い立場」であり、意見を持つことも自己主張することもないという自己認識は、愛好会活動を通して得られた、行動することの面白さや発言することの新鮮さの感覚と対比して把握された。低い自己認識を持つ会員にとって、役員をはじめとする他の会員たちが同じ立場を持ちながらも果敢に意見する様子、そして現状に対して諦念するのではなく、前向きに変化を起こそうとする姿勢は、驚きと感銘を伴って捉えられた。その衝撃が、当時の会員によって鮮明に描かれている。

わたしにとっての愛好会は、まさに目覚めの第一歩でした。家庭の中でのみ考え、判断していた自分の視野がどんなに狭いものであったか、折につけ反省させられます。<sup>17)</sup>

(筆者注：昭和) 53年の評議員会に、はじめて出席し、同じ主婦という立場の方が、堂々と意見をのべられるのを見て、ショックを受けたこと。会長のお話を聞いて、その前向きな向上心に圧倒されたこと。(中略) スポーツと学習という両方を兼ねそなえた愛好会の存在は、目を開かれた思いでした。<sup>18)</sup>

愛好会は、卓球に関する活動のみならず、学習にも力を入れていた。自主学习グループ「芝の会」や、リーダー研修会といった学習の場を持ち、スポーツと学習という二つの要素の両立を目指したのは、知識をつけ、意見を持ち、自主運営に生かすためだけではない。当時の主婦たちにとって学ぶこと自体が新鮮だった状況のなか、学びを通して異なる意見に出会い、違いに向き合うことでの学びは、主婦たちの価値観や自己認識にも変容をもたらす契機となった。

きっと愛好会とか主婦卓球愛好会に出会ってなかったら、こう自分をこう見せたいとか、鎧をたくさん着てたと思うんですね。一つ一ついろんなことを学ぶことによって、自分が自然になれて気負わずに一人一人の人を認めるとか、こうだからこうじゃなきゃいけないじゃなくて、一人一人を大切にするとかその思いを汲み取るとか、いろんな気持ちのなか、自分の生き方にすごく変化が。<sup>19)</sup>

ここまで述べてきたような、活動を通じた女性の自立や権利意識の高まりは、決して個としての自立を強いるものでも、主婦という立場を否定するものでもなかった。むしろ愛好会は生活との結びつきが強い「主婦」の集団であることを念頭においた上で、弱さを抱えつつも支え合い、相互作用を与え合うような、しなやかなあり方を追求し続けた。愛好会が大切にしていたのは、「主婦」であるがゆえに抱える弱さを認めつつも、自分の意見を表明し、行動を起こすことで、「主婦」という立場を持つからこそ与える、家庭や地域、社会への影響に自覚的になることであった。

### (3) 視野の広がりがもたらす「主婦」への希望

「主婦」の集団であることを意識しつつも、前提として権利を持つ一個人であるという思考の転換を模索する愛好会の姿や、会員の意識変容が見て取れる場面として、各サークルの代表者から成る会議体である評議員会や、役員としての活動が挙げられる。それらの活動に対して寄せられた声からは、女性であり、妻であり、母親であり、主婦である、という現状を悲観し否定するのではなく、立場を引き受けつつも、他者や社会に生かしていくことができ得るのだという新たな視点への気づきから、希望を得ていく様相が浮かび上がってくる。

はじめて評議委員会（原文ママ）に出席した折、会長の話に魅きつけられました。女として母親として身につけたものを、地域社会に還元できる人になるように。（中略）ということをおっしゃったからです。<sup>20)</sup>

（筆者注：昭和）52年に役員をした時は、仕事を覚えるばかりでくたびれた感じがしましたが、もう一年やってみた時、主旨を肌で感じ、地域に帰って頑張る気になりました。<sup>21)</sup>

愛好会の役員をしたお陰でいろいろなことができるようになり、運営方法等、校区に採り入れていきますしスポーツ少年団においても生かしております。<sup>22)</sup>

愛好会が目指す姿は、夫や子ども、家庭のためだけに身を捧げるという元来の主婦像とは一線を画すものであった。自らのおかれた現状だけに目を向けるのではなく、卓球を媒介として周りの問題に目を向けると、公民館サークルや女性スポーツ、地域活動に対して、向き合うべき課題と共に自分がなしうる貢献があることに気づく。教養を高め、学びを子どもや地域、スポーツ活動へと還元していくことは、旧来的な意識を持つ主婦にとってはあまりに高邁な理想とも捉えられうるものではあるが、自分と同じ「主婦」という立場にある者が説き、具現化していく姿は、自分でも体現しうるのだという感覚を伴う希望でもあったといえよう。

## 4. おわりに

1970年代から80年代初頭において、「伝統的主婦像」や男性優位、亭主関白の思潮は、不文律ながらも根深く残っていた。会員が自らを「弱い立場」であり、「自分の意見を言う」ことをせず「与えられたことだけに満足」していたと自己を顧みていることから認められるように、それらの思潮は男性側の論理であっただけでなく、女性側にも諦めを伴って甘受されていたきらいがある。家族のことを優先し家庭を円滑に回そうという配慮は、翻って自分のことは後回しにすることを常態化させ、自らを軽んじる傾向を強めてきた。主婦のスポーツは生活と切り離しては考えがたい一方で、それを理由に発言や行動を控えるよ

うな状況では、主婦の自律につながり得ないという課題意識が、前田さんはじめ役員陣に芽生え、徐々に愛好会全体へと伝播していったのである。

愛好会は、自律的な意識を持つ個人の集まりであったからこそ、自主的・民主的な団体となり得た。しかしながら、会員の多くは入会当初から状況変革の意識を持っていたわけではなく、学習と経験、省察の機会が会員らの意識に変容をもたらしていった。「主婦」という同じ立場の者同士が集うという同質性は、前提や認識を共有することで、弱さを認め合い、お互いの状況を尊重しながら理解しあうことを促進する。「主婦」という立場を現状への悲観と紐付けるのではなく、愛好会や会員それぞれが抱える課題の改善に生かしたこと、そして自ら意見し行動を起こすことを促進してきたことは、愛好会の妙であったといえよう。

#### 【注】

- 1) 江刺正吾『女性スポーツの社会学』不昧堂出版、1992、32頁。
- 2) 高岡治子「女性スポーツの大衆化 ―東洋の魔女からママさんバレーへ」石坂友司・松林秀樹編著『一九六四年東京オリンピックは何を生んだのか』青弓社、2018、66頁。
- 3) 2023年3月23日、あいれふ（福岡市健康づくりサポートセンター）にて実施。
- 4) 厨・田上「第1章 地域スポーツの新しい文脈とその展開」『地域スポーツの創造と展開 福岡市からの提言』16-18頁。
- 5) 厨・佐藤・井神「第3章 地域スポーツの新しい文脈とその展開 第1節 共同性を拓き、豊かな地域活動を育てるスポーツクラブ」同上、87-88頁。
- 6) 同上。
- 7) 前田恒子「いま愛好会をふりかえる：二十周年講演から」『会報』19号、1991、8頁。
- 8) 同上。前田さんによると、当時は強いチームづくりなどが協会の体質ではないかと、その下では初心者を楽しめる大会などできないのではないかと疑問を抱いていたという。しかしながら、あくまで当時のことであり、今（1991年）は好意的に協力していただいていると補足している。
- 9) なお、ママさんバレーの全国連盟においても、日本バレーボール協会との競技理念の相違などの理由から独立に向けた動きが強まり、独立採算・自主運営への見通しが立った2014年に同協会から脱退している。詳細は、高岡治子「家庭婦人スポーツの構造と変容に関する社会学的研究―ママさんバレーボールを事例として―」（博士論文：つくばリポジトリ）2017、101-107頁を参照されたい。
- 10) 高岡治子「女性スポーツの大衆化 ―東洋の魔女からママさんバレーへ」石坂友司・松林秀樹編著『一九六四年東京オリンピックは何を生んだのか』青弓社、2018、78頁。
- 11) 前田恒子「いま愛好会をふりかえる：二十周年講演から」『会報』19号、1991、11頁。
- 12) 同上、6頁。
- 13) 田村稔宏「市民体育館のうつりかわり」『愛好会会報記念特集号』1983、21頁。
- 14) 中原圭子さんへのインタビュー調査（2023年3月23日）
- 15) 同上。
- 16) 田岡鎮男『さいはての社会教育』自己出版、1998、324頁。
- 17) 伊藤ふみ子「目覚め」『会報』7号、1979、33頁。
- 18) 宮元寿子「愛好会と私」『会報記念特集号』1983、59頁。
- 19) 田中理恵子さんへのインタビュー調査（2022年3月20日）
- 20) 今村多恵子「愛好会で育った私」『会報記念特集号』1983、101頁。
- 21) 矢野敬子「愛好会をふりかえて十年を語る」『会報10周年記念号』9号、1981、23頁。
- 22) 秋吉信子、同上、24頁。